

# ウルトラマンと敵の変遷から見る社会意識の変化

加納智貴

筆者は幼少期から、日本の特撮作品のウルトラシリーズの作品の視聴をしていた。各作品によって、ウルトラマンや敵、テーマなどの設定が異なっていることが多い。筆者はこの変化には何かしらの影響や傾向があると考え、それがどのようなものか明らかにすることが研究の目的である。

1章では先行研究から、ウルトラシリーズの1作目である『ウルトラ Q』の敵には、同じ特撮作品でメイン監督が一緒である『ゴジラ』のゴジラに描かれている、戦争や当時の戦後の社会背景という要素が影響していることがわかった。制作者たちの社会意識やテーマなどが表れているからだ。そして、それは『ウルトラマン』の敵にも受け通がれており、敵には当時の社会問題などの、社会背景が関わっている。しかし、先行研究では、昭和の頃に放送された、複数のウルトラマンの作品しか対象にされておらず、昭和後期から平成以降がない。本研究ではこの期間の作品を対象とする。

2章では筆者がウルトラシリーズの作品を視聴し分析を、1つの作品のテーマや特徴をまとめた。さらに各話の内容や敵から読み取れる、関連していると思われる当時の社会の要素を区分してまとめた。分析した作品は、年代ごとに大きく区切り、昭和ウルトラシリーズ、平成ウルトラシリーズ、令和ウルトラシリーズとした。

研究の結果、昭和ウルトラシリーズは第1期や第2期では、当時の経済復興による開発やそれによる公害や汚染などの社会問題が、敵に多く表れており、過度な開発の社会に対する制作陣への不安や警報があったと考えられる。第3期は当時の第1次オイルショックによる経済不振から、視聴率獲得のために、当時のテレビで流行だった要素を取り入れた。

海外制作展開になり、環境問題とジェンダーや人種を含めた多様性など、当時の世界での社会の要素が表れ、それが平成以降の日本で制作されるウルトラマンの作品にも影響を与えている。平成ウルトラシリーズになり、環境問題など海外制作展開でふれた、世界規模の社会の問題の要素が多くなり、令和ウルトラシリーズでもこの傾向がある。

これらのことから、日本国内の社会問題に目を受けていたものが世界との関わり、自国以外の問題へと意識が向かっていく。社会が複雑化、多様化する中で、ウルトラ作品もその変化を受け続け変化し続けている。